

2015年度静岡県図書館大会 大学図書館
電子書籍の普及と大学図書館の役割 ～導入・提供・活用の事例から～

大学図書館の変化と電子学術書利用実験プロジェクトの周辺

2015年11月9日
慶應義塾大学メディアセンター本部
入江 伸

自己紹介

- 東京初音センター(現在はFPS)で情報システム・社会システム開発、日本語形態素解析ソフトを使った応用システム開発
 - 図書館システムのユーザ 国会図書館 立命館 関大 同志社...
 - 図書館システムをはじめて経験したには放送大学のJLIS導入でした。
- 1990 KOSMOS稼働(JLIS X70) 慶應・富士通との共同開発
 - 選取 演習支援 で参加
- 1997/01 慶應義塾入社、メディアセンター配属
 - CMI (デジタル...) とのプロジェクト
 - 山形共同プロジェクト 松森編纂デジタルアーカイブ構築
 - RLJへ目録データを登録
- 1998/10 KOSMOSII 稼働
 - UTLASを使った目録選取 US MARC採用(RLJ 目録利用)
- 1999/01 目録集中処理機構発足 2001 集中処理機構担当課長
- 2001- ライブラリーシステム研究会開催(239.50)
- 2001-2003 MLA連携とデジタルアーカイブへの取り組み
- 2004/04 デジタルメディアコンテンツ統合研究機構 (DRM担当課長)
- 2005/10 慶應義塾大学メディアセンター本部
 - 電子化とリポジトリ担当 CSS受託
 - 慶研とXoolNips システム開発 私大は国立と違ったことをしないとめたない
- 2006/ 全文検索実験
- 2006/ Google library project担当
- 2009/02 次期システムプロジェクト(KOSMOSIII Aleph Promo SFX)
- 2010/06 電子情報環境担当
 - 学入回廊担当 (協)
 - 電子情報環境担当 (電子)
 - システム担当 図書館関連システム
 - 電子資源担当 電子資料の受入・アクセス管理
 - 電子化学集録担当 電子化関連
- 2010/10 電子書籍元年 電子学術書利用実験プロジェクト開始(KCCS KHMS)
 - 3省学子部の募集へ応募したが採択
- 2014/ Over Drive社 Media DO社と利用実験 JDLIS(日本電子図書館サービス)との利用実験開始

ここまではシステム屋

ここからは電子化とコンテンツ屋

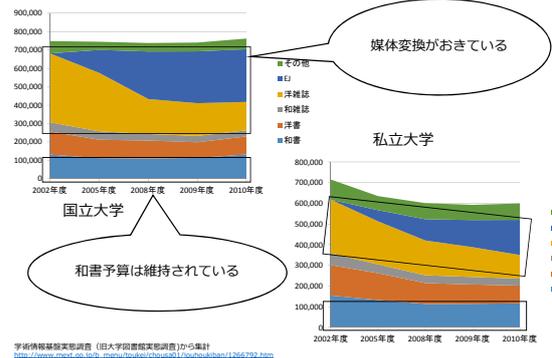
電子学術書利用実験

OverDrive
JDLIS との利用実験

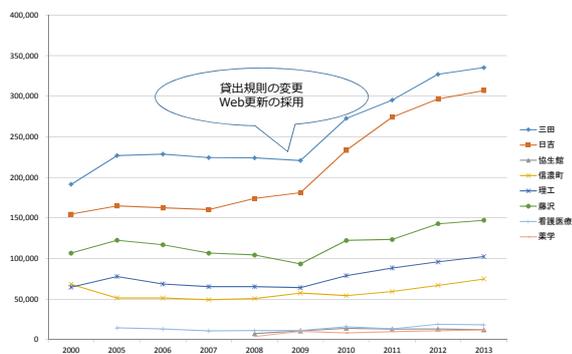
2000年からの大学図書館の
変化を統計で見る

この20年は電子への対応だった

2002-2010年の図書費の遷移
大規模国立・私大大学比較(8学部以上)



貸出数は増加

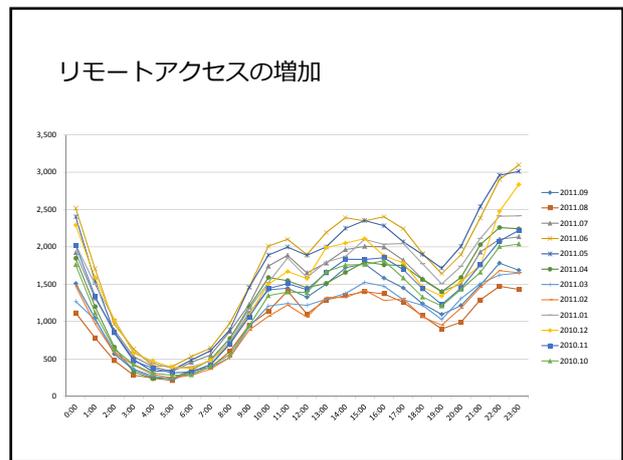
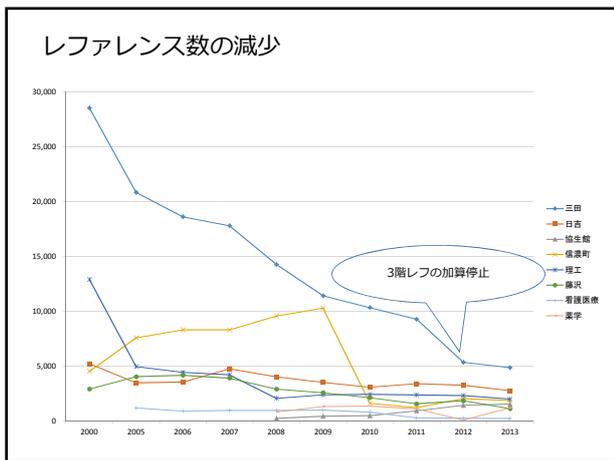
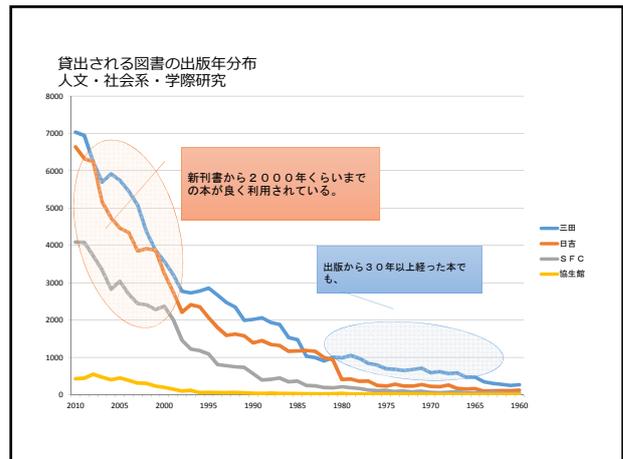
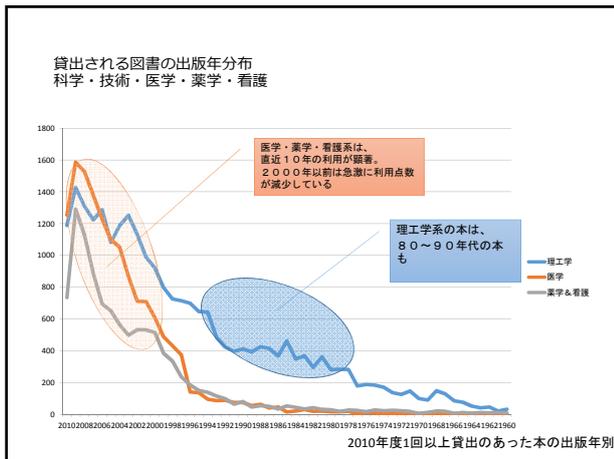


利用の中心は「和書」

2010年度慶應全体での貸出(和洋別)
学部生が主 そのため和書を買っている
国立は事情が違う

	人文・社会・教養 (学際)	自然科学・医学・医療・薬学	保存書庫	合計
和書	90.2%	96.2%	65.5%	90.9%
洋書	9.8%	3.8%	34.5%	9.1%

貸出記録からの「推計」
記録に和洋の区別がないため、
BookIDや貸出区分から推計している



大学図書館(国内)の変化

変化していること

- 洋雑誌から電子ジャーナルへ媒体変換した
 - 読めるタイトルは1万から7万
 - 費用は、1.5倍以上(紙の洋雑誌からの比較)
 - 紙の雑誌は、和雑誌だけが残っている
 - アクセス管理 購入管理が複雑化 新しい電子管理担当の登場
- 図書(紙) 購入は減少
- ILL数は減少
- レファレンス数の激減 資料はデータベース・Googleへ

変化していないこと

- 私大のサービスは和図書
 - 貸出の85%が和書
 - 貸出数の多い和書は紙のまま
- 和書の電子書籍は普及しているの？
- 入館者が少し減少(努力の成果)
- 図書館の外的変化
 - 研究は電子環境へ移った 医学部は電子環境へ移行
 - 生協での書籍・教科書売上は激減 シラバスでの教科書指定の減少

米国:Google BooksからHathiTrust - shared Printまで

- 2010年雑誌・レファレンス資料の電子化は ほぼ終了し、図書の大量電子化とサービス提供の時代を迎えている
- 2010年以降は、紙資料の共同リポジトリへ <http://www.hathitrust.org/>
- 米国の23の主要大学によって立ち上げられた、協同デジタルリポジトリ
- 学術研究利用を主眼にデザイン
- Google Book Searchのバックアップ的機能も担当
- 2013年1月現在、約1064万冊のコンテンツを収録(うちハブリックドメインは約330万冊)
- 紙の共同管理と長期保存へ
- Currently Digitized(2012年当時)
 - 10,641,149 total volumes
 - 5,597,740 book titles
 - 277,169 serial titles
 - 3,724,401,800 pages
 - 477 terabytes
 - 126 miles
 - 8,646 tons
 - 3,303,874 volumes(~31% of total) in the public domain
- 著作権保護期間内の資料は、検索のみ可
- 著作権管理システムもある。
- 履歴もデータ提供を予定
- メタデータは著作権管理、流通、資料特性、撮影データも含まれる
- 最近ではアメリカ留学から帰国した研究者から 日本では使えないのかという質問がある

学生モニターの声 (Reactions, Voices)

• 3つのポイント

アンケート(Questionnaires) やインタビューの結果をまとめると、3つのポイントがあった。

1. 紙の本と電子書籍は「異質」なモノ
当面は、「紙の本と電子書籍の使い分け」
2. 「発見 (Finding)」の重要性
3. 「量」が欲しい

図書館と電子学術書の関係： 図書館と電子は相性がいい

- 図書館の本
 - 一度しか読まない、調べる、買う前に読んでみる
 - これは電子になれば使いやすい
 - 電子を求めている
- 買う本
 - 何回も読む 教科書
- 図書館の電子書籍は紙の販売の邪魔はしない
- 電子書籍は量が必要(1980-現在 までの15万冊)
- ソーシャルリーディング
 - 自分でレビューなどを書きたいというよりは、属性に基づいた統計的なデータを活用したい。

学生が良かったこと

- 利用しやすい 利用できる電子書籍を提供してほしい
- 最終的には、コンテンツの量
- コンテンツの量を増やしてほしい
- 自分の分野の本がない
- 量が少ないと1冊の電子ブックの評価にならざるを得ないが、カテゴリ分けしたり、リンクしたりして量があって初めて可能になる電子の良い機能があると思う

23

慶應実験から共同実験への狙い

1. 基盤となるニーズの明確化
2. 大学図書館が必要とするコンテンツの把握 貸出履歴の分析と公開
3. 電子書籍に関する技術的な評価
4. 大学向けビジネスの創出

貸出数と1万タイトルの貸出比

	2011			2012		
	貸出総数	貸出タイトル数	1万タイトルの貸出比	貸出総数	貸出タイトル数	1万タイトルの貸出比
B	967319	186836	36.97%	870046	178732	36.55%
A	725124	163596	31.69%	812849	171142	31.84%
C	267975	81078	48.82%	285443	86451	48.56%
E	210108	82367	42.77%	219199	83194	43.34%
F	171184	76983	43.67%	185402	80343	45.48%
G	43682	13663		43265	14186	
H	20712	13659		24101	14624	
I	11081	3394		12629	3612	

貸出総数：集計対象数

http://ebookp2013.blogspot.jp/2014/03/blog-post_20.html 神戸大学報

電子学術書ビジネスについて

大学図書館全体の和書(2010)

- 大学数 国 86 公 80 私 598
- 和書経費 17,045 / 総経費 66,633 割合26%
- 大学図書館では和書 170億しか買ってない。
 - その上 毎年 減少している
 - 学術書の市場は 1500億から2000億くらい?
 - 大学図書館だけでは、市場への影響力が弱い
- 和書は大規模大学だけではなく、中小私大の購入額が多いため、EJと違って大学数の確保も重要
- 学生の購入額が大きい。

これからの可能性

- 教育手法の変化 研究・教育スタイルの変化
- 図書館ではなく、教材、教科書販売と結びつける必要性（図書館への販売だけを考えても将来はない）
- 学術書（和書）の電子書籍化を、教育手法の変化と結びつけてビジネスへ広がる可能性
 - マイクロコンテンツ化による少額課金
 - 大規模アーカイブの利用課金販売
 - 教育コンテンツ制作・アーカイブ・著作権管理との統合
- ディスカバリーとの連携により大規模アーカイブサービスの可能性
 - これまでディスカバリーには否定的でしたが、来年度からディスカバリーの導入を予定しています。

その他の電子書籍プラットフォーム実験 システム的な特徴と評価

- 可能な範囲でプラットフォームの評価を進める
 - 大学図書館の立場を理解してもらう
 - 学生の意見を反映する
 - システム的な連携の推進
- 評価のポイント
 - 認証 システム連携 メタデータ
 - フォーマット 全文検索 利用しやすさ 他書籍PDFとの統合
 - 貸出ダウンロード(offline で使えるか セキュリティー)
 - 学習的機能の実装(付箋 メモ SNS連携...)
- 評価したプラットフォーム
 - Net Library
 - MARUZEN eBook Library - BookLOOPER
 - OverDrive + Media do
 - 日本電子図書館サービス JDLS